

## 国際人口学会第 23 回大会出席報告

石 南 國

国際人口学会 (International Union for the Scientific Study of Population; IUSSP, Belgium) は、1927年に家族計画の先駆者、マーガレット・サンガーの主導で人口現象と社会発展とを関連づけた専門家を主として組織されたジュネーブ会議が主体となって創設された。その後1947年に再編され、今年はその50周年に当る。北京での大会はこれを記念して開催された50周年記念 (50th Anniversary of the Reconstitution) 「世界人口会議」(第23回会議; The XXIIIrd General Population Conference) である。北京世界人口会議は、中国人口学会の主催の下、中国国家計画生育委員会、国連人口基金 (UNFPA) ならびに国際人口学会 (IUSSP) の後援で開催された。1981年のフィリピン大会に次いで、アジア地域では二度目の大会である。創設・再編当初はともかく近年では4年毎に大会が開催されてきた。4年毎のこの大会は今日では人口研究の最も有力な集会となっている。

北京会議には、約80カ国から1200ないし1400人の会員ならびに関係者が出席して83のセッションで、1997年10月11日(日)から17日(金)の7日間にわたって、〈21世紀に直面する地球上の人口発展の問題〉を検討し、そして〈種々様々の人口問題への解決策〉を求めて討議が行われた。2つのPlenary Session (4本の講演) と23のFormal Session (176本の報告、以下略)に加えて、41のInformal Session (216本)、10のSide Meeting (10本) (公的プログラムに追加されたMeeting: このうち2つは招待論文を中心とするMeeting)、4つのPoster Session (4本) (会議) および82のセッションで、総計411本の研究成果の報告、シンポジウムおよび人口討議が行われた。

11日と12日は、出席者の登録と前日祭の色が濃く、中国での開催を意義あらしめるようなスケジュールとサイド・ミーティングからなっていた。11日に世界保健機構 (WHO) のリプロダクティブ・ヘルスに関する社会科学的調査研究報告および国際社会学会の人口部会報告のセッションが実施された。12日には中国人口学会主催の〈中国の人口学に関するシンポジウム〉と世界人口会議のオープニング・セレモニーに続いて開催国とIUSSPによるレセプションが行われ、13日からの会議に向けて祝杯と友好親善のひとときをもつことができた。

〈中国の人口学に関するシンポジウム〉では、オープニング・セレモニーに続いて午前、午後各4セッションで、中国の人口センサスと人口統計学の近代化 (6点)、中国の人口転換と家族

計画(6点)、中国の人口移動と都市化(6点)、中国の人口高齢化と高齢者保護(6点)、中国の結婚と家族(6点)、中国の人口と持続可能な発展(10点)、中国の女性問題(7点)、女性の健康問題(6点)の8つの部門を当て、53の報告を中心に論議がなされた。中国には1953、1964、1982年および1990年の人口センサスが存在するが、さらに1955年の1%抽出人口についてのサンプル・サーベイを中心に、中国人口の変動を分析し、精度を高める試みをしており、人口抑制の強化も手伝って人口転換が中国各地で進行し、小子化・高齢化の問題に直面していることが明らかにされた。その裏では女性の健康問題がカイロ国際人口・開発会議—人口・持続的経済成長・持続可能な開発の相互関係—(1994年)で提唱されたリプロダクティブ・ヘルスの問題もこれに呼応して起こっているようである。さらに先進国にみれるリプロダクティブ・ライツの問題も陰伏的に起こっているようである。

世界人口会議の〈オープニング・セレモニー〉は、夕方になって漸く始まった。開催国側の歓迎挨拶の後、First Plenary Sessionに入る。このセッションでは、まず会長のJohn Caldwellが〈グローバルな出産力の転換と理論統合の必要性〉について人口転換の地球的伝播の展望と理論の統合化の必要が提唱された。次に中国の重鎮Wu Cangpingが〈世紀転換点における人口の科学的研究とその歴史的使命〉について科学としての人口研究の重要性を解いた。

IUSSPの大会初日の13日(月)は、午前・午後各4つのFormal Sessionと各4つのInformal Sessionが行われた。〈リプロダクティブ・ヘルス—政策発展とプログラムの実体〉(8本)、〈ジェンダー差別と性行動〉(6本)、〈人口の南南移動：家族戦略と国家政策〉(4本)、〈家族計画の社会的衝撃〉(6本)などのセッションで、リプロダクティブ・ヘルス出生力抑制政策と家族計画に関連する実体調査報告がなされた。夜の部に入り、今大会の第1回会員総会が行われた。

14日(火)は、午前中に2つのFormal Sessionと2つのInformal Session、〈人的資本蓄積と貧困の持続性〉(4本)、〈旧ソ連および東欧の死亡率の反転〉(7本)、〈人口転換：類似性と多様性〉(13本)、〈経営人口学における方法と応用〉(6本)などのセッションで、新たな事実が明らかにされたが、その中でも旧ソ連・東欧で死亡率の動きが逆行して上昇しているという報告に接した。これには驚きを禁じ得なかった。

15日(水)は、午前の部で3つのFormal Sessionと5つのInformal Session、午後の部で8つのSide Meeting、4つのPoster Sessionが開催された。〈宗教、文化および性〉(4本)、〈東欧の経済変動への人口学的適応〉(7本)、〈国際移民政策：政治的および文化的統合〉(9本)、〈途上国の出生力転換〉(7本)、〈20世紀における人口学および政治的危機と大変動〉(8本)、〈途上国の青年：教育、社会化および健康〉(7本)、〈人口移動と家族変動〉(1本)、〈カイロ会議3年後の人口とリプロダクティブ・ヘルス・プログラム〉(1本)、〈中国とインドの人口転換と女性の発展戦略〉(1本)などのセッションで、東欧諸国の人口事情の実体とカイロ国際人口・開発会議後のリプロダクティブ・ヘルスに関する研究と実践の報告に関心を寄せることができた。

16日(木)は、午前の部で2つの Formal Session と 3つの Informal Session, 午後の部で2つの Formal Session と 2つの Informal Session が開催された。〈中国の女性エンパワーメント, 貧困の絶滅および社会発展: 人口学との関連で〉(4本), 〈人口分析データの分析方法の発展〉(11本), 〈中国の社会—経済改革過程の出生率, 家族計画およびリプロダクティブ・ヘルス〉(6本), 〈人口, 環境および持続可能性〉(10本)などのセッションで, 女性側からの人口政策への接近と持続可能な発展と環境問題が取り上げられていた。夜の部に入り, 今大会の第2回会員総会が行われた。

最終日の17日(金)は、午前の部で2つの Formal Session と 2つの Informal Session, 午後の部で3つの Informal Session が開催された。〈子どものジェンダー的選択とその帰結〉(14本), 〈中国の家族規模規準〉(6本), 〈産業国家の貧困とその健康の死亡率への帰結〉(5本)などのセッションで, 中国がいま直面している貧困からの解放の途を模索しているものの, 持続可能な開発の課題がまっぴらであることに気づいているようであった。

夕方に Second Plenary Session が開催された。クロージング・セレモニーを兼ねた IUSSP の再建 50 周年祝典行事の一環として行われた。J. A. M. de Carvalho が〈人口研究, 社会的付託と新しい人口学の実体〉, James W. Vaupel が〈高齢化と長寿の人口学的分析〉のテーマで, 今日的人口学についての講演をして長くて実りの多かった有意義な会期の大会を閉じた。

総じて, 7日間の世界人口会議は, 人口問題, あるいは広い意味での持続可能な経済発展の問題を, カイロ国際人口・開発会議につづいて再び世界の注目を集めた。最も重要なことは世界各地から集まった人口専門家が共に認識された人口問題への解決法にその頭脳の総力を結集したことである。大部分の報告者が出生抑制, 人口高齢化, リプロダクティブ・ヘルスならびに貧困などの諸問題に真剣に取り組んだ。そして 21 世紀におけるグローバルな人口成長経路と持続可能な社会経済進歩を制御できるものと考えているようであった。かなり困難なことではあるが。

大会が中国で開催されたこともあって, 筆者は世紀的実験を試みている中国の人口政策の成り行きに大きな関心をもった。悪名高い一人っ子政策は 17 年前に実施された。その効果が上がったろうことは想像に難くなかったが, 予期した通り中国側では, 効果的な家族計画政策は約 3 億の人口を押さえることができたとしている。その自然増加率は去年の段階で 10.42% (千人当たり) にまで下がっている。中国女性の合計特殊出生率 (TFR) はいまでは 1.4 の水準に下がっている。1965 年の 6.5 に比べて, その低下速度は日本よりも早い。日本では戦後 1947 年に 4.54 の水準であった。1989 年に 1.57 ショックがあったが, その後も低下して 1996 年に 1.43 にまで下がった。中国はこの日本の水準を下回っているのである。中国はこの家族計画の顕著な進歩がその持続可能な社会経済発展に貢献しているばかりでなく, 世界人口を安定させることにも役立っていると信じているようだ。にもかかわらず, いまだ中国では年に 1300 万の増加が続いていることに危惧の念を抱いているようである。中国政府は, この北京人口会議でみられた国際社会との協調を

重んじて、持続可能な社会経済発展を受け入れる努力をすることによって、世界の平和と繁栄に貢献したい意向を持っているようである。